

9. 西保地区の昔の結婚儀礼

下 里 真 悠 子

1. はじめに
2. 嫁取りの手順
3. 嫁取りの意義
4. おわりに

1. はじめに

私は結婚という言葉を知ると、それにまつわる負の問題が多く取り沙汰されていることがまず思い起こされる。現代日本において、晩婚化、また未婚率の上昇は大きな社会問題のひとつである。結婚するのが当たり前だった時代から、結婚しないという選択を取る人たち、あるいは結婚が出来ないという人たちが急速に増える時代になった。結婚産業が発達し、西洋式の結婚儀礼を輸入した豪華な「ウェディング」が女性たちに提示され促進されるのと裏腹に、社会が発展するにしたがって生じた様々な問題が、結婚のありようとその意義に大きく変化を与えているのである。

そんな中、西保地区に赴いた際に昔の結婚に関する話を聞いて、古い時代の事柄に触れると同時に、現代との違いに新鮮な気持ちを覚えた。そして調査を深めてゆくにつれ、昔の人たちの結婚という通過儀礼への接し方に興味を惹かれていった。

以上が本章を書くに至った動機である。本章では、西保地区の古い結婚儀礼についての記述と考察を展開する。まず、主に60～70歳代の女性数名への聞き取りを元にして、かつての結婚儀礼の様子について詳しく記述する。次に、実際に当時の人々が結婚儀礼をどのように捉えていたのか、またその背景は何かについて、儀礼が変容した現代との比較を交えて考察していく。

よって、本章で「昔」と表現する際には、主に聞き取りを行った人々が結婚した年代である昭和20～30年代（1940～50年代）の頃を指す。また、聞き取りは上大沢に住む女性に対するものが量を占めているため、若干情報に偏りがあるかもしれない。この点については反省しているところだが、あらかじめ留意いただきたい。

2. 嫁取りの手順

西保では昔、結婚もしくは結婚式のことを「嫁取り」と呼んでいた。これは言葉のとおり結婚するにあたって嫁を相手先に出す場合のことで、事例は少ないものの、婿を出す場合は「婿取り」と言う。以下に、一般的な嫁取りの進行について記述してゆく。

結婚の決定

現代とは違い、昔は結婚を決めるのは本人の意思ではなく、両家の親同士が話し合っ取り決めるものだった。結婚をする年齢もずっと早く、「二十歳の振袖みっともない」といった言葉があるように、大抵10代後半で嫁に行っていた。

また、結婚するのは集落内、あるいは近隣集落の家同士であることが多かった。西保地区は他の集落から離れているため、嫁や婿のやり取りが昔から行われていた。門前のほうへも嫁いで行くものが多かったが、逆に西保へやって来る嫁は少なかったようだ。それに、西保の中でも海沿いの集落とそうでない集落の違いがあった。上大沢には海の仕事が出来ないと嫁は務まらないため、上大沢からとついで来る分には問題ないが、上山や西二又から嫁に行くことはなかった。

嫁・婿のやり取りは、似たような経済状況の家同士でするのが普通だった。「提灯と釣り鐘は合わない」(姿が似ていても全く違うことの喩え)とよく言い、田舎ほどそういう考えが強かった。両家に格差があつては、豊かな家のほうに「貧乏が移る」と考えたようだ。

そうして結婚を決めると、それを仲立ちするための仲人を立てる。仲人は、結婚する当人の親類であったり近隣の者であったりしたが、既婚の男女二人でするのが慣わしであった。大昔は一人でしていたともいうが、片方が欠けると縁起が悪いとされ、仲人が一人というのは忌み嫌われた。新郎新婦を結び付ける仲人が一人であると、それが新しい夫婦がまた一人となってしまう暗示のように思われるからではないだろうか。

結納

結婚を決めると、次は結納に進む。結納とは、婚約を取り交わした証として、新婦家と新郎家が贈り物を交換する式である。その言葉通り、両家の「結」びつきを祝い、品物を互いに「納」めることによって、結婚するという意志を正式に確認するのである。その手順は、日本全国で様々な形態を取るものの、一般的には仲人、あるいは仲人と新郎家が結納品を新婦家に持参し、これを授受した新婦家が、新郎家に結納品(結納返し)を送るといった体裁を取る。

西保地区では、古くはこの儀式を「酒納め」と呼んだ。ただ、その内容はいたって質素なものだった。

上大沢の70歳代の女性が、「私は酒2升で（嫁に）貰われてきたのよ」と笑って話してくれたように、新郎家为新婦家に酒を2升ばかり渡して済ませるのが常だったようだ。とはいえ、結納も祝い事であるから、質素ながらも贈り物には縁起を担いでいる。酒を2升という量も、これから「二人」になる夫婦には1升・3升などの奇数は縁起が悪いと考えてのことだった。

そして、昭和30年代頃になると、お酒を心ばかり渡す質素なものから、様々な種類の結納品が増えていった。酒の他にお祝い金を包み、昆布・するめに熨斗をつけて持って行くようになったのである。昆布とするめは、どちらも縁起を担いだ語呂合わせにちなんでおり、昆布＝子産婦（子を産む女（婦））、するめ＝留守をする女、に掛けている。これが現在になると、熨斗も豪華なものを使うようになり、昔に比べるときれいな品物を送り合うようになっている。

いずれにせよ、「酒納め」を済ますということが結納を済ますということであり、新婦が本当に新郎家に入るのが決まったというしるしとなる。

また、結納を取り交わした際には、両家の人間と仲人が話し合いを持ち、本番の儀式ともいえる、嫁取り当日の日程を決めていた。大抵、日程は冬（1,2月）の内にあらかじめ決めておき、春を迎える3月頃に嫁取りを行うのが一般的だった。農村では、農業や漁業が日々の生活の糧であるから、生業の繁忙期には手間のかかることは行わないという理由だと思われる。ただ、嫁取りを夏になってから行ったのでは、「暑くて（花嫁の）着物に困るんじゃないかしらね」と嫁取りを経験した方（70歳代、女性）が言うように、実際的な理由もあったようだ。

嫁取り当日の様子

i. 迎え

嫁取りの儀式は、当日の朝（9時～10頃）に、仲人と新郎側の親類数人で新婦家へ嫁を迎えに行くことから始まる。新郎家からやって来る親類は、叔父・叔母であったり兄弟であったりと様々であった。この際、縁起を担いで末広りの扇子と祝儀を持っていく。基本的に、このお迎えの一行に婿が同行することはないが、まれに付いて行くこともあった。

新郎家の一行が新婦家に到着すると、まず新婦家が彼らを軽く饗応する。この接待では、赤飯・白飯・煮しめ・神酒等の、簡単な御膳が振る舞われる。新郎家为新婦家に祝儀を渡し、新婦家からも祝儀をもらう。

一通り接待が終わったら、一行はいよいよ嫁を連れ出し、再び新郎家へ戻る。花嫁は大抵振袖に打掛という出で立ちである。今度は新郎家からやって来た集団に新婦家の親類も加わり、花嫁と一緒に嫁ぎ先へと向かう。普通は、新郎側から来た者達の倍くらいの人数が、新婦家から出される。したがって、帰りの一行の人数は、行きの3倍ほどになる。こうして新婦家から付いて行く親類が多いのは、たくさんの嫁入り

道具を担いで行く人員が必要だったためである。嫁入り道具は、箆笥類・長持ち・布団・鏡台等の、主に花嫁が嫁ぎ先で使用する身辺器具を持って行った。

かくして両家の親類が合わさった大人数の花嫁道中が形成されるのだが、これに花嫁の両親が付いて行くことはなかったようだ。

ii. 花嫁道中

西保地区では、花嫁が新郎家に着くまでの道中に、村人たちが縄を張ってその進路を妨害する習慣がある。これは「縄張り」（なわばり）と呼ばれ、このように第三者が花嫁道中を妨げる風習は、日本の各地で見られるものである。

縄張りはいくまで儀礼的なものであり、村人たちが本気で花嫁道中を妨げようという意図のものではない。昔から脈々と続いてきた習慣であり、何故縄を張るのか、という問いについて誰もが異口同音に「知らない」と応える。しかし、共通している認識は、縄張りは祝いの儀式だということである。花嫁道中で張られる縄の数は、多ければ多いほど良いとされる。恐らく、縄張りの儀式の主眼は、花嫁が新郎家に嫁いで来ることを地域の人々に認めてもらうということなのであろう。その証拠に、他の集落へと嫁ぐ花嫁には、縄は張られないのである。

村人たちは、大人も子供も縄を張ったが、大抵男性は子供と老人が主で、成人した者というと女性がほとんどだった。成人男性はこの習慣には参加しなかったらしい。こうして張られた何本もの縄が張られた道を通過するために、花嫁道中の人間はお金を渡して縄を解いてもらう。新婦家側のほうが、事前に5銭ばかりのお金を紙に包んだものをいくつも用意しておくのである。そして、縄を張った者にこれを渡して通してもらう。花嫁道中におけるこのお金を渡す係は「縄切り」と言い、新婦家から付いて来た親類の誰かが担当する。

村人たちはこの縄張りを楽しみにしていたようだ。子供たちにとっては、お小遣いを稼げる絶好の機会である。どこそこの家で嫁取りがあると聞くと、村人たちはそら来たところぞって縄を張りに出かけたらしい。

また、縄の代わりに酒樽で道を塞ぐということもあった。この酒樽の上にはお金が乗せられており、花嫁たちは道を通してもらうにはその倍の金額を樽の主へ渡さなければならなかった。乗せられた金額次第では大金を積まなければ通してもらえないことになるので、滅多にあることではなかったが、たまに意地悪でこのようなことをする人もあった。

他に、「道中酒」といって、花嫁道中を取り囲む村人たちに新婦家から持参したお神酒を振る舞う習慣もあった。これも、神酒と盃を持って村人たちに振る舞う係がちゃんと決まっていた。中には、盃を介さずに村人の口に直接注ぐなどということもあったようである。

いずれにせよ、縄張りなどの花嫁道中の儀式を現在も行っているのは上大沢だけで、他の集落では消滅してしまっている。現在、挙式は輪島市街やそれ以外の場所に出て行って、式場で行うのが当たり前になっている。結婚式の場合が町内から町外に移行していくにしたがって、縄張りの習慣は衰退していったのであろう。

iii. 婚家入り

にぎやかな道中を経て、いよいよ花嫁一行が新郎家の前に到着すると、まず水合わせという儀式が行われる。これは北陸地方に多く見られる風習だが、新郎家と新婦家の両家から水を汲んで来て、一つに合わせるという儀式である。ちなみに、この儀式は上大沢では昔はあまり行われなかった。水を合わせることは両家が合わることを象徴的に表していると考えられるが、少ない世帯数の中で婚姻を繰り返していた上大沢は、「村全体でひとつの親戚のようなものだから、水を合わせる意味はあまりない」のだと70歳代の女性は語っていた。ただ現在では、単なる結婚式の儀礼的な面から、水合わせをする家も出てきたらしい。

それと同時に、新郎家から出された盃に酒が注がれ、花嫁がそれを飲んでから、空になった盃を地面に投げ付けて割る習慣がある。盃がぱっくりと綺麗に割れると縁起が良いのだとされる。割れるというのは、普通は縁起の悪さが連想されることかもしれないが、恐らく花嫁がこれからずっと新郎家の人間になるという決意を象徴した行為ではないかと推察される。この盃は、普通は花嫁が割るものだが、振袖でめかし込んだ者には盃を投げ付けにくいということもあり、仲人が代理で割ることもあったようだ。

そうして花嫁が新郎家に入った後は、まず神棚、次に仏壇にお参りをする。ここから披露宴が始まるまで、花嫁が一息つける時間である。神仏へのお参りを済ませた後、花嫁とその親類と新郎側の親類数人が集まって、奥の間でお茶や饅頭などをいただく。この饗応を「おちつき」といい、ここでは神酒なども振る舞われ、式の間はものを食べることができない嫁も、お茶や食べ物をいただいた。

iv. 披露宴

嫁取りの儀式を締めくくる披露宴は、大体昼頃から始められる。近隣から村人を招いての、一番大きな宴会となる。招かれてくる人々は、今と違って祝儀を持っては来ずに、お祝いの場に着いた。

披露宴を行う大広間では、仏壇を上座にして、花嫁、仲人、両親などの近親者から、花嫁と縁が濃い親戚の順に席に着く。驚くことに、昔の世代では新郎が披露宴に顔を見せることはなかった。披露宴が開かれている最中も、田畑に出て行って普段の仕事をしていたそうなのである。最近になると夫婦揃って披露宴に臨むようになり、花嫁の隣に花婿が並ぶようになった。

披露宴は、特に司会進行役が設定されているわけではないが、参席者が全員揃ったところで、まず姑が

「お嫁さんをもらったので、ささやかなものだけど今日はゆっくり食べてください」といったふうを開始の挨拶をする。それから自由に食べたり飲んだりといった宴が始まる。宴で饗応される料理は、姑を始めとする新郎家の親類が皆で集まって作った。また、姑は料理をする他にも、宴の最中で色々指示をしたりと忙しいため、基本的に自分の席に座る暇がないほどであった。このように、実質的に披露宴を切り盛りしていたのは姑だと思われる。

参席者は、自由に民謡などの歌を歌ったりした。こうした余興は、現在の結婚式にも通じるものである。また、周囲が盛り上がるのとは対照的に、花嫁は料理を食べるでもなく、静かに座っていた。

そして、披露宴の最中に、花嫁と姑で三々九度の親子盃をする。今でこそ結婚式で三々九度といえば夫婦盃が思い出されるが、昔は夫婦で盃を交わすことはなかった。そもそも夫が式に参席しないのだから、しょうがないのである。三々九度という儀式は、下から大きい順に3つ重ねられた盃があり、それに上から順に酒を注いで、どの杯も三口で飲み干してゆくといったものである。全部で9度酒を飲むことから、三々九度という名が付いた。嫁取りにまつわる儀式が多く縁起を担いでいるのと同様に、三というのはめでたい陽数であり、陽数の中でも九が最もめでたく、縁起のいい数字なのである。仲人も杯をいただき、嫁→仲人→姑の順に飲み、最後に姑と嫁で飲む。

親子盃を終わらせると、披露宴も終わりとなる。その際には、姑が嫁を連れて宴会の下座まで出てくる。そこで改めて、姑が参席者全員に向かって花嫁を紹介し、どうぞよろしく願いますといった挨拶をする。この姑の口上を以って、披露宴はお開きとなる。

こうして式が済んだ後、村の子供たちを呼び、嫁と仲人のご馳走の余りを「苞（つと）」に入れてやり、お祝いとして配る風習がある。苞というのは、藁などを編んで作った入れ物である。子供たちはこのお祝い品を楽しみにしていたようだ。

ちなみに、披露宴には多くの村の人たちが招かれるが、昔はそのほとんどが女性であった。中でも、年配の女性が多かった。村人たちを招く際には、姑が「今度いつ何時に嫁を取りますから、誰でもいらしてください」といったように一軒一軒回って声を掛けていくのだが、それを聞いてやって来るのは女性ばかりだったようだ。

里帰り

披露宴が終わると、花嫁はすぐに里帰りをした。嫁取りが済んだその日の夜に実家に戻ってしまうのである。里帰りの日数は仲人と事前に決めておき、大体2,3日から10日ほど実家で過ごす。それから母に連れられ、饅頭や赤飯などの土産を持って新郎家に戻ってくるのである。花嫁が持ってきたお土産は、新郎家の人間が村中に配って回った。

結婚後、花嫁はしばらく実家と新郎家を行ったり来たりする生活で、子供が出来たとしてもそれは変わ

らない。これは、嫁ぎ先では旦那も含め、面識のない人間ばかりで嫁が気疲れするため、休息を取るために帰るのである。実家ならば姑に気を遣ったりすることもない。

このような嫁の里帰りに対して、夫が迎えに赴くということではなく、ただ戻ってくるのを待つのみであった。

現在ではこのような頻繁な嫁の里帰りは見られない。

3. 嫁取りの意義

前節では、嫁取りに関する一連の行為を、流れを追って示した。しかし、あくまで表面的な行動を記したに過ぎない。この節では、昔の人々が実際にどのような思いで嫁取りという通過儀礼に関わっていったのかを考察したい。

今でこそ、結婚というのは華やかで幸せの象徴のようなイメージが形成されているが、それは結婚する当人である男女の自由意志による恋愛結婚が一般的になったためである。勿論お見合い結婚も存在しているが、だいぶ少数派になって来ている。その実情も、恋愛結婚をしようにも相手が見つからないため、お見合いをセッティングする企業などに頼るという例が増えている。それに対して、昔はお見合いをする以前に全て親が結婚の段取りを進行していったから、それまでろくに顔を合わせたこともないような人のところに嫁に行くというのはよくあることだった。

上大沢のHさん（70歳代、女性）の体験談によると、18歳のときS家に嫁入りするよう親たちから勧められたという。特に彼女の曾祖母が、「S家に嫁に行けば、田んぼも畑もあるし、食えんこともないし、いいぞ」というふうに強く嫁入りを勧めてきたそうだ。この発言から窺えることは、両親が子供の結婚を考える際に重要なのは、子供の結婚相手の容姿や性格といった個人的な属性ではなく、相手の家の財政面だったということだ。現在のような、結婚するに先立つものが男女の恋愛という精神的なものではなく、あくまで共に生活を営んでいけるかという現実的な観点から結婚を考えていたのである。

現代人には、このような昔の結婚方式は、当人の感情を無視した押し付けとして受け取られがちだろう。昔の人は好きな人と結婚できなくて気の毒だったとさえ感じるかもしれない。果たして、Hさんは両親が決めた結婚についてどう感じていたのだろうか。親に結婚を勧められた当時の心境を尋ねてみると、返ってきたのは実にあっけらかんとした答えだった。「（この年になれば）お嫁に行くもんだと思って行った。特に何とも思わなかったねえ」。

他の何人かの女性に同じような質問をしても、大体同じような反応が返ってきた。当人ではなく家同士が結婚を取り決めるのは、当たり前のこととして受け止められていたようだ。調査をしている最中、多くの人からしばしば「そういうもんだった」という言葉が聞かれた。昔からそうだったのだからと、疑問に

感じることはなかったのだろう。

現代では恋愛感情だけが先行して結婚したものの、いざ家族として生活を営んでいくうちに上手くいかなくなり、離婚に至るというケースが大変増えている。恋愛で結びついたために、その絆が冷めてしまったことが原因で夫婦として破綻してしまうのである。現代の結婚と昔の結婚とどちらがいいか、という話ではない。しかし両親が結婚を決定していた昔の状況を、必ずしも不幸なものだと断定できないのは確かなことである。

次に、実際の結婚式＝嫁取り（の儀式）についてである。冒頭でも述べたように、現代において結婚式は人生のハイライトとして、特に女性にとって重要視される傾向にある。巨額の費用をかけ、式場を借り、美しいウェディングドレスをまとい、花嫁は幸せの瞬間を謳歌する、といった構図が出来上がっている。世間にあふれるウェディング情報誌や、テレビでも度々見受けられるチャペルのCM等が示すように、結婚は産業の一つとして成り立っているのである。

昔の嫁取りの儀式にこのような感情の昂ぶりがあったのかというと、そうではなかったろうと推察される。大沢の50歳代の女性の体験談では、嫁取りの日は概して不安で、「楽しみとかじゃなかったねえ」と話していた。式は「朝早くから大変」で、仲人さんに連れられて行き、披露宴で「人形みたいに座っていただけ」で、周りの人が賑やかになっている中、「早く終わらないかなあ」と思っていたそうだ。両親が決めた結婚を当たり前のことと受け入れていたのだから、個人的な喜びの感情が発生しにくいのも無理はないと思われる。

そして、周囲の人々は嫁取りの儀式をどう捉えていたのだろうか。嫁取りは、新郎新婦にとってだけでなく、村人にとっても日常とは違うイベントのひとつだった。村の人々を招いて行われる披露宴は、花嫁を紹介する場としての意義もあるが、地域の人々の交流の場として機能していた。昔は食べるものもあまりなく、料理や神酒が振る舞われる披露宴はそれだけで楽しみなものだったという。昔の披露宴に対して「みんなでご飯を食べて、そんだけのことさね」と言っていたHさんの台詞からは、現代のようにものがあるふれありとあらゆる娯楽の手段がある世界と違って、つましい日々を送っていた西保の人々の生活が窺い知れるのである。

また、嫁取りの儀式が花嫁だけでなく、彼女が所属する共同体のための行事であったという側面も見えてくる。村の人々は、花嫁道中では喜んで縄を張り、新しくやって来る花嫁を迎え入れる。そして披露宴に参加し、宴を楽しむ。儀式の大変さから気苦労が多いであろう花嫁より、周囲の人間のほうが嫁取りという行事を満喫していたのではないだろうか。

現代の披露宴においても、それが人々の交流の場でもあることには違いないが、新しい夫婦の門出を祝福する場という意味合いのほうが強いと思われる。出席者が挨拶をしたり、歌を歌うなどの余興をするにしても、あくまで新郎新婦を中心に式は進んでいく。新郎が式に顔を出さなかったり、新婦がただじっと

していた昔の嫁取りとは様子が違うように感じられる。

それから、終戦後のものがあまりない時代は、嫁取りの儀式も簡単に済まされていた。「やらない人はやらないし、お金のある人は盛大にやる」（70歳代、女性）そうである。式をしない場合は、ただ単に嫁取りの日に親類を何人か呼んで、囲炉裏の周りでお神酒を飲んだり食べ物を頂いたりするだけだった。花嫁に関しては、ただ家の荷物を持ってくるだけだったのである。「ある日いきなり嫁がいた」と冗談のように言う男性もあり、女性がいつの間にか嫁に取られているということはよくあった。これを評して「狐の嫁取り」と言っただろう。

このように、結婚の意義というものが現代とは大分様相が異なっていることが分かる。昔と今との違いで一番目立つのは、儀式の規模自体が格段に違うことである。これは、何より日本の経済成長によって豊かな暮らしが広がったことが原因と考えられる。結婚式も産業の一つとなり、金銭が動く物事となったのである。こうなったのも、戦後に欧米式の恋愛観が普及したことにより、結婚式は愛し合う男女が結ばれる記念の日という観念が定着し、それを華やかなものにしたいという志向が強まったからである。

このような新郎新婦側の意気込みも、昔と今ではかなりの差が存在する。戦後、欧米式の恋愛観の普及に加え、日本古来の男性優位のジェンダー観も見直されていったため、女性の地位が向上した。そして、女性をもののようにやり取りしているような家と家同士が主体の婚姻から、新郎新婦本人が主体の婚姻に変化していったため、当事者意識が強くなっていったのだろう。

また、結婚式が共同体のための行事という側面を少しずつ失っていることも見逃せない。現代の結婚式は、嫁入りをする家では行われず、式場を借りて行方。新郎新婦が暮らす地域の周辺住民が招待されるわけではなく、親戚や知人が新郎新婦によって選択され、式場に招待されるのである。これによって地域性は失われ、結婚式の非日常性は強くなる。

いずれにしても、一番確実なのは、結婚式が現代のように「一生に一度の行事」（なかなか一度とは言えなくなっているが）と重要性を強調し盛大に盛り上げるのとは違い、人生のうちの通過点のひとつとして淡々と受け止められていたことである。質素だった時代を反映しているとも言えよう。

4. おわりに

ここまで、西保地区の古い結婚儀礼について分析してきた。そこで感じたことは、西保という能登の農村の古い時代の質素さと、自分が暮らす現代の豊かな消費型社会とのコントラストである。結婚という通過儀礼ひとつ取っても、それは顕著に現れる。昔の西保と現代社会を単純に比較することは出来ない。しかし、曲がりなりにも北陸で一番大きい都市とされる金沢に住んでいる私の目には、西保はまだのどこかで懐かしい雰囲気を感じさせる所だったが、その西保でも変化は随分と起こっているのである。調査の最中

に、「今は色んなことが豪華になった」（70歳代、女性）というような台詞を何度か聞くことが出来た。

今では、高度に発達した情報・輸送技術のおかげで、お金さえあれば全国どこでも似たような豊かさを享受できるようになっている。勿論、都市と地方で繁栄の度合いに差はあるし、地方の過疎化が叫ばれて久しい状況ではあるが、余程の田舎でなければ車や電車等の移動手段を使って、都会に暮らすような人々と同等の生活物品を手に出来る。言い換えれば、日本のどこに行っても大差がないような状況になっているのである。地域毎の文化的特色といったものが、昔ほど見られなくなってきたように感じられるのだ。

今回の調査では、結婚という儀礼を通して昔の人々の生活に触れると同時に、これから先、日本社会はどのような変遷を辿っていくのだろうかと考えさせられることになった。結婚が当たり前のこととして人生に組み込まれていた昔とは違い、単なる選択肢のひとつになる時代が来るかもしれない。